

日本の歴史 47

『グローバル幕末史： 幕末日本人は世界をどう見ていたか』

町田明広著（草思社 2015）

本書の請求記号 210.59 ⅡMac

稲垣宏行

幕末史と言いますと、我々は日本国内の事情を中心に考えてしまいがちです。明治維新史や対外認識論に造詣ある著者は、海外の動向を中心にした幕末史を本書で提示しています。そして、この時代の中で往々にして誤解され易い事例も、そこに至るまでの経緯を提示することで解説しています。

まず幕末史で重要なのが、200年以上に及んだ「鎖国」です。鎖国と言えば、中国とオランダ以外の外国船は大砲で追い払う光景が即座に思い浮かぶことでしょう。しかし、実際にそこまで強硬だったのは鎖国開始からの15年間と、ロシア船が日本近海で不穏な動きを見せていた時期、モリソン号事件発生時の僅かな期間だけでした。それ以外は上陸こそ認めなかったものの、物資の補給を認めるなど穏便に対処していました。

日米修好通商条約についても、一方的に不利な条件を押しつけられたというイメージがあります。殊に関税自主権の面で、外国側の製品にかかる関税が5%と低かったことが理由の一つに挙げられます。しかし、条約締結当初からそうだった訳ではありません。当初の関税は20%でした。著者は日本に不利な条件が押しつけられた本当の原因が、長州の攘夷派が起こした下関砲撃事件にあると述べています。

攘夷思想も幕末史において重要です。この思想には、現時点では開国を認め、海外との貿易や交流などで国力を蓄え、将来的に諸外国より有利な立場に立つことを目指す「大攘夷」と、前述の下関砲撃事件のように、飽くまで開国を拒み諸外国との徹底抗戦を貫く「小攘夷」の2つの考え方があっていわれていますが、著者は大攘夷の最たる存在が、伊藤博文や五代友厚ら長州や薩摩からロンドンへ留学した下級藩士だと見えています。

彼らは知識もさることながら、国際社会で生きるための感性を養いました。そして日本と西欧の力関係を認識し、小攘夷の無意味さを悟りました。しかし最大の収穫は、彼らが倒幕を含めた日本の富国化を目指して目的を同じくした点にあります。幕臣や藩士の垣根を越えた「留学生サークル」に近い関係を形成したのです。長州と薩摩は当時、敵対関係でしたが、留学を経てその無意味さに気付いたのです。著者はこれを「ロンドン薩長同盟」と名付けており、日本での「薩長同盟」に先駆けて成立したものと述べています。

本書の最大の特徴は、欧米と幕府や諸藩の貿易や交流を中心に据えることで、幕末史の本当の舞台が欧米にあることを強く示唆している点です。しかし、前述の「ロンドン薩長同盟」のように、著者独自の造語で解り易さを意識して解説している点も大きな特徴と言えます。

留学した薩摩藩士と長州藩士についても興味深い相違点が示されています。薩摩は藩の費用があったため恵まれていたのに対し、長州は自費で留学していました。しかし、それゆえに長州は使命感や目的意識が高く、明治国家の建設に重要な役割を果たしたと本書は述べています。

また本書は、開明的な藩に圧力をかける幕府に対しては批判的ですが、岩瀬忠震ただなりのような、時勢を見据えて渡航解禁や海外視察を推し進めた幕臣は大いに評価しています。また、島津久光や井上馨など余り評判の良くない人物も、長所の部分を取り上げています。そこからは、単に旧来の見方に囚われない姿勢だけでなく、その人物の意外な一面すら見えてきます。これも本書の魅力の一つだと思います。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）